

## 目 次

序文	1
第1部	13
第1章 3・11以後の日本文学の表象 —『それでも三月は、また』における 「根源的な喪失」の課題—	15
第2章 3・11以後の日本文学の振幅 —『それでも三月は、また』における「原発」 の課題 —	61
第3章 3・11震災によって形成された日本文化中での 「異郷」—被災者の生の声に耳を澄ませつつ—	105
第4章 トポロジーとしての「故郷」の視点から見る原発文 学—水上勉の『故郷』を中心に—	141
第5章 二者択一の課題に迫る日本原発文学像 — 3・11を境に未来像を描いた「隣りの風車」 と「不死の島」—	175

第2部	199
第1章 日本文學中3・11東日本大震災之「挫敗」 —與傳統「無常觀」救贖間之關聯—	201
第2章 烏爾利希・貝克「風險社會」論述下的日本 原發文學書寫—對應出311東日本大震災重創 日本後的「改變」—	231
結語	271
テキスト	283
参考文献	285
初出一覽	295

## 序文

2011年3月11日（金曜日）14時46分に日本の東北地方で発生した日本観測史上最大のマグニチュード9の大地震、それに伴う津波襲来、原子力発電所の放射性物質の漏洩が引き起こした「三位一体の受難」<sup>1</sup>（地震・津波・原発事故）、複合型災害のため、日本は戦後未曾有の災難・災害に見舞われることになった。緊急状態中、日本政府は早速2011年4月1日の閣議で「東日本大震災」とし、それ以降、メディアもそれに倣い、一本化した。それで、「東日本大震災」の名称が世に誕生し、「3・11」と通称されるようになった。その後、「福島」は原爆投下地のヒロシマ、ナガサキと同じように、平仮名で表記されることなく、片仮名の「フクシマ」と表記されることにより、烙印された深刻な事態を歴史と共に歩む特

1 マニユエル・ヤン(2012.2)「負債資本主義時代における黙示録と踊る死者のコモンズ」河出書房新社編集部編『歴史としての3・11』河出書房新社 P93 では、「3・11における三位一体の受難（地震/津波/原発事故）は死の覚悟をわたしたちに植え付けた」とある。